

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

<翻訳> トーマス・ヴィルトグルーバー著 『シュタイナー学校の美術教育 1年生から8年生までの絵画と線描』（翻訳?）

著者	島田 佳枝
雑誌名	埼玉学園大学紀要．人間学部篇
巻	13
ページ	281-284
発行年	2013-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00000303/



翻訳

トーマス・ヴィルトグルーバー著

『シュタイナー学校の美術教育—1年生から8年生までの絵画と線描』

(翻訳 I)

Thomas Wildgruber, *Painting and Drawing in Waldorf Schools : Classes 1 to 8*

(Japanese translation I)

島田佳枝訳

SHIMADA, Yoshie

はしがき

ここに訳出するものの原著は、Thomas Wildgruber による *Malen und Zeichnen 1. bis 8. schuljahr* (Verlag Freies Geistesleben 2009) であり、本稿は原著の英訳版 *Painting and Drawing In Waldorf Schools : Classes 1 to 8* (Translated by Matthew Barton, Floris Books 2012) を翻訳したものである。

本書で、著者は次のように紹介されている。

「トーマス・ヴィルトグルーバーは1946年にドイツで生まれた。彼は哲学、政治学、ジャーナリズムを学び、国際開発および国際政治の分野においてリサーチ・アシスタントをつとめた後、マンハイムにあるシュタイナー教育教員養成課程で学んだ。1979年からはシュタイナー学校のクラス担任および、工芸と美術の教師として働いてきた。画家ラヨシュ・ボロスとの出会いは、「絵画の資源」に基づいた美術教育を発展させる努力へと彼を導いた。彼はいま教師たちに「遊びの規則を用いた描画」というテーマで講習を行っている。」¹⁾

本書はシュタイナー学校の1年生から8年生（6歳から14歳）までの美術教育（水彩画Paintingおよび線描画Drawing）の具体的なあり方と援助法をその内容としている。多くのカラー図版を用い、各学年の具体的な課題や援助法について言及しているところが本書の特徴である。

周知の通り、シュタイナー教育は、ドイツの思想家、ルドルフ・シュタイナー（Rudolf Steiner 1861～1925年）の教育思想に基づく教育実践であるが、日

本では未だ異端視されがちである。その一方で、シュタイナー学校はいま世界で1000校を超え、欧米を中心に多くの国が公教育の一つとして認めている。日本では現在、8校のシュタイナー学校が設立されており、そのうち2校が学校法人の認可を受けている状況である。徐々にという形ではあれ、シュタイナー教育は日本でも草の根的に支持層を広げ、実践の足場を築きつつあるといえるだろう。人々のシュタイナー教育への期待は次第に高まりを見せているのである。

本稿では、美術教育を入り口としながらシュタイナー教育を理解する糸口をもつことを願い、序論の訳出を試みる次第である。

序章—本書の使用法

子ども達とともに絵を描いたり線描を行うことは楽しいものです。子ども達は自発的に新たな始まりとして絵を創造します。それは、ある目的を優先するという方法ではなく、過剰なエネルギーを用いて、きわめて自然に行われます。いちど仕上げられると、その絵は多かれ少なかれ用済みとなります。子どもが絵に残した痕跡は、その子ども自身の内部にあり、魂や精神内にも存在します。学齢期の子どもは、そうした自由に伸びゆく力を技術や能力に変容することが大好きです。

本書は教師や在宅教育（ホーム・スクーリング）をする親のために書かれました。教えることは道案内することを意味します。つまり、有用性ではなく

キーワード：トーマス・ヴィルトグルーバー、絵画と線描、シュタイナー教育、美術教育

Key words : Thomas Wildgruber, painting and drawing, waldorf schools, art education

意義に焦点を合わせ、子どもたちの潜在的な能力を導いたり援助したりするのです。使用されることのないあふれるほどの形成力は、退化し、単なる反応様式へと弱まってしまいます。これに対し、芸術的にもたらされた創造力は、知覚する能力を促進し、創造的に形づくる力や、個々の洞察力を得る力を促進します。絵画は意味を創出したり、人々を驚かし、よく見ることを啓発するための独自の言語を持っています。この言語の構造あるいはこの言語の文法は、本書で“芸術的もしくは絵画的資源”と呼んでいるものに該当します。これらの資源に調和的に作用する事柄を調べ、子どもにそうした課題を与えるために、私たち教師は、道案内をし、挑戦し、援助する者として、興味と関心と絶えざる努力が必要です。

第1章 美術教育における絵画的資源

第1章では“絵画的資源”と呼んでいるものをより明確に説明しています。ここではポール・セザンヌやヘンリ・マティスといったクラシック・モダニズムのパイオニアたちによるコメントを素描することに加え、彼らの師や理論家であるアドルフ・ヘルゼル、ヨハネス・イッテン、パウル・クレー、ワシリー・カンディンスキーらも加えて、彼らが追求した内的なプロセスを考察します。注意深く見るならば、それらによって絵画的資源が明らかとなり、その表現力の何がしかを感じることができるかもしれません。本章の最後の部分（教育的感覚論）では、こうした絵画的資源が肉体組織に健康をもたらし、世界を生き生きと創造的に理解するための刺激をもたらすことを可能にする感覚的教育の方法を示します。第1章への註は今後の読書に対して多くの示唆と情報源を提供します。

第2章 ラヨシュ・ボロス (Lajos Boros) によって考案された12の練習

本書で初めて記録された実習方法は、方法論として、いかに絵画的資源が段階を踏んで明確になるかを示しています。画家であり美術教育家でもあるラヨシュ・ボロスは、長年にわたる仕事と芸術的な探究を通して、このアプローチを開発しました。彼の授業に参加した人たちの数多くの作品例は、明快に

構築され開発された課題の可能性を最大に生かす道すじを示しています。

第3章 フォルメン線描、線から平面へ

人類の進化や子どもの発達において、線は表現上、最も初期の絵画的な手段といえます。パウル・クレーやワシリー・カンディンスキーらによる研究は、線から平面への流動的な変化を示しています。これはある表現方法を示しますが、それはシュタイナー学校で発展してきたフォルメン線描によってより高めることができます。そうした可能性がここでは、実際の学級や治療において描かれた幾つかの絵の例とともに説明されます。

第4章 自由画と指導された絵

第2・7年期を受け持つ教師は、描画において「自由な」と「指導された」ということの間の良いバランスを見出すことが必要です。子どもたちには自由に描いたり色をぬったりすることを繰り返しさせることができるし、そうすべきでしょう。しかしながら、バランスのよい成長は、慎重なガイダンスによってのみ育てられます。このガイダンスは、新たなスキルを定着させ、自由な芸術活動の基礎を提供するものです。子どもたちは大人の手本を喜んで模倣します。文字の絵画的な導入は、いかにこれが実用的に展開されるかの例を示しています。

線描や水彩画において手本とされる絵は、学際的な方法で、子どもの学習能力と表現力を高めることができます。本章では植物の絵を例として挙げ、後に（第6章で）、より遠いテーマとの関連を示します。

本章ではまた、教師が描いた絵を黒板上に提示するか、白い紙の上に提示するか、どちらがよいのかという疑問について考えます。

第5章 遊びの規則を用いた描画

本章では、クラス担任が受け持つ8年間の水彩画と線描のための明確な体系へと入っていきます。

シラーの遊び概念にしたがって、「自由と規則」の間の緊張は「遊びの規則」という概念によって考察されます。また、子どもの発達にとってのそうした遊びの重要性が考察されます。授業での実践のために

ここで紹介される遊びの規則は、第1章で述べられた絵画的資源の単純化された形のなかで生じます。

第6章 シュタイナー学校における絵画の授業

美術の授業と必要なものの準備についての情報を提示した後、1年生の児童たちとともに水彩画の第一歩へと踏み出します。

以下の絵の課題は、特定の教育的な援助を提供します。

- ・テーマに導くための簡略な意見
- ・段階をふんだ絵の課題
- ・絵画的資源の効果と重要性に関連する主な事柄への註
- ・子どもの描いた（ふつうは成功した）絵と教師が描いた幾つかの絵による各課題の実例

この課題の全体にわたる構造は、著者のシュタイナー学校における30年以上もの1年生から8年生（6歳から14歳まで）のクラス担任としての経験からもたらされたものです。妖精の話や伝説や神話といった多くの主題は、シュタイナー学校のカリキュラムにある主題から引き出されました。もちろん、それらはまた他の源泉から引き出されることも可能です。

ここで扱う課題の本質は、絵画的資源に根ざし、全ての子どもたちが通過する発達段階に関与しているので、あらゆるタイプの学校の教師がこれらを用いることができます。学校課程ではない場所で教える教師や、子どもに線描や水彩をさせたいと願う親も同様です。絵のテーマは、あらゆる物語や、子どもが知るようになる自然現象のうちに見出すことができます。水彩もしくは線描のあらゆる課題にとって重要なことは、完全な完成をもたらすことです。加えて、制作のふさわしい「技術」を目にもたらすことです。これは意志を発達させるだけでなく、質の感覚もまた教えます。完成されなかったものや、勝手気ままに、でたらめに制作されたものは、正反對に作用するのです。

絵画的源泉もしくは遊びの規則から導かれた課題のもとでは、色や形の細部が互いのエネルギーや輝きを高めあい、意義ある内的相互関係性が発達する

ことを見出すことができます。これは表現上の調和を導きます。こうした方法で、絵を用いて学ぶことで、子どもには内的安定感と強さがもたらされます。

本書が提示する200以上の課題のなかから、楽しさと同時に、たしかな実践的な方法的アプローチを発見した読者は、自分自身で新しいテーマやアイディアを発展させることができるでしょう。何か新たなものが健全な方法に基づいている限り、子どもたちはそれに熱中するでしょう。

彼らは、特別に工夫された方法において、事物の真の性質を感じることができます。とりわけ、子どもたちを心の中で思いながら考えられた方法においては、そうなのです。私たち自身が生み出してきた教材（課題）は活気を生みます。どのような年齢の、どのようなクラスにおいても、取り上げられる特定のテーマは、子どもたちがすでに発達させた能力に依存しています。また技能やグループの必要性にも依存しています。ですから、必ずしも本書の示す流れに従う必要もなければ、各年齢に与えられている示唆にも一致する必要はありません。これらのことは冒頭の色刷りされた頁の見出しに見ることができます。

最後に、各クラスへの示唆となるテーマの概観を示します。

1年生：38の課題

- ・黄、青、赤の原色を用いた色彩の第一歩
- ・第二の色への発展—原色を混ぜることによる緑、オレンジ、紫
- ・色の対比や関係への発展—大きな形と小さな形、「色彩の対話」において色自身が表現する雰囲気
- ・年間を通して身につく技術

2年生：32の課題

- ・色彩の物語
- ・寓話や伝説からの象徴的なテーマ
- ・植物のモチーフ
- ・2色の絵
- ・年間を通して身につく技術

3年生：30の課題

- ・旧約聖書からのテーマ
- ・秋の葉のコラージュ
- ・年間を通して身につく技術

註

- 1) *Painting and Drawing In Waldorf Schools :
Classes 1 to 8* (Floris Books 2012) 背表紙

4年生：22の課題

- ・北方神話からのテーマ
- ・動物学からの絵
- ・洞窟絵

5年生：32の課題

- ・ギリシア神話からのテーマ
- ・植物学からの絵
- ・4・5年生において身につく技術

6年生：20の課題

- ・白黒線描：面とコントラストの練習
- ・光のあつた物体上の光と影
- ・色彩理論と色彩対比の学習
- ・年間を通して身につく技術

7年生：20の課題

- ・白黒線描：自然物および静物
- ・色彩遠近法の絵：風景
- ・線遠近法（正面）
 - 教師のための導入
 - 実験的な導入
 - 立方体の形
 - 等しい距離
 - 円
- ・年間を通して身につく技術

8年生：38の課題

- ・線遠近法（正面と斜め）：立体、建築、風景：
構成画と非構成画)
- ・平面デザイン
- ・彫塑と描画
- ・色彩対比
- ・リノプリント
- ・はさみを用いたコラージュ
- ・年間を通して身につく技術